



杉

3月12日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月12日のおはなし「杉」

長生きの秘訣？ 年寄りが言った。二、三百年考えさせてくれ。

おれが返事に窮していると、冗談だよと年寄りも続けた。二、三百年も待ったたら、あんたもう生きてられんだろう、かっかっか。はあ、まあ。おれは何とも情けない声で返事をした。冗談を言われるとは思わなかった。もっと、こう、真面目な相手のような気がしていたのだ。

あんたは長生きしたいのかね、と年寄りに聞き返されて、特にそういうわけではないと思った。長生きの秘訣を尋ねたのは、他に気の利いた質問を思いつかなかったからだ。ものすごい年寄りを目の前にしたら誰だってまずはそのあたりから尋ねてしまうのではなからうか。

では長生きしたくないのか。改めてそう問いただされてまたまたおれは口ごもった。もちろんすぐに死ぬのはいやだけど、とりわけ長生きをしたいとも思わない。だからおれは素直にそう返事をした。ギネスブックに載りたいわけじゃないですね。

ギネスブック？ と年寄りが訊く。何だねそれは。

おれはちょっと焦った。ギネスブックが何かを知らない年寄りにギネスブックについて説明するには何から始めればいいのか。

ギネスというのはビールのメーカーで、というところから語り起こすべきか、だからそもそもは酒を飲みながら話すのについてつな話題、すなわちギネスビールの杯が進むような雑学ネタを集めた本として、つまりはパブでのビールの売れ行きを促進するためのセールスプロモーションの一環として始まったらしいとか、いやいや、そんな本の歴史みたいな話はいらないだろう。もっとずばっと本の特徴を捉えて言えばよからう。

世界記録がいろいろ書いてある本です。おれは説明を試みた。毎年出版されていて、世界一爪が長い人とか、信じられないくらいのおぼの人とか、林檎の皮むきの記録とか、ものすごく太った犬とか、スポーツの記録とか、巨大な建築や、速い乗物や、珍しい生き物とか載っていて、だいたい思いつく限りありとあらゆる世界記録が書いてあります。人間やら動物やらの世界一の年寄りも載ってますね。

ふうん。年寄りはずいぶんいた。誰が読むんだね、そんなものを。

誰が？ そうですね、そういう変わった記録に興味がある人が。あ。そうそう。ギネスというのはビールのメーカーでね、そもそもは酒を飲みながら話す面白そうな小ネタ集として始まった本らしいですよ。

そうかそうか。酒を飲みながら話す内容か。それならわかる。

しまった。やっぱりそこから語り起こせば良かったのか。

London...

えっ？

When I was in London.It was a long long time a go.

年寄りは懐かしい時代を思い起こすように目を閉じ、うっとりした表情になって、しかも妙に綺麗なブリティッシュ・イングリッシュで話し始めた。自慢じゃないが学生時代英語では赤点をとって続けたおれはあわててさえぎった。ちょちょちょっと待ってください。おれ英語ダメなんですよ。

年寄りは少しだけ目を開けると、冷ややかな横目でおれを一瞥し、また目をつむるとするすると首を引っ込め、前肢、後肢も引っ込めてしまった。たったいまのいままでおれに話しかけていた年寄りの姿はもうなく、そこにはただごろりと、巨大な岩の塊然とした物体があるばかりだ。

あの、とおれは声をかけた。すみません、余計なことを言いました。けれど返事はなく、おれ

の言葉はむなしくゾウガメ舎の空中に吸い込まれていった。とたんにおれは我に返ったようになった。真夜中の動物園。ゾウガメ舎で手足を引っ込めたゾウガメに向かって独り言を呟く男、それがおれだ。ゾウガメが自分に話しかけてきたと思い込んで長生きの秘訣を尋ねたり、ギネスブックについて説明を試みたりしたが、どれもこれも全部幻聴だったに違いない。おれは頭がどうかしているのだ。女房と子どもと三人、幸せに暮らしているのに、自分が自分でないような、このままではいけないような気がし始めていたのも、このところ少々頭がおかしくなり始めていたせいかもしれない。

途方に暮れてしばらくそのまま立ち尽くしていたが、ゾウガメは話すどころか動こうともしない。考えてみれば、ゾウガメは最初からそうやって寝ていただけなのかもしれない。喋っていると思い込んでいたのはおれの幻覚だったのだろう。ゾウガメがロンドンで暮らしていたなんて、どんな夢を見ていたんだ？ おれは自分の想像力の突拍子もなさに呆れて少し笑った。

ふと気づくとゾウガメの甲羅を掃除するためのデッキブラシを持ったままだった。甲羅の掃除が途中だったが、もういいだろう。バケツに突っ込んで洗って片付けよう。片付けて、宿直室に戻ろう。動物園はやめるべきかもしれない。これが最後のお勤めだ。

目が覚めたよ、アルダブラゾウガメさん。解説ボードに目をやりながらおれは心の裡でつぶやいた。あんたのおかげで自分を見つめ直すきっかけになった。すごいな、アルダブラゾウガメさん。推定220歳。世界最長寿の生き物の可能性あり。セーシェル生まれ。セーシェルってどこだ？ 全然わかんないぞ。1793年、フランス海軍に捕獲されパリ動物園へ。1815年、ロンドン動物園に譲渡。1952年、日本へ。上野動物園で人気者に。1973年から1988年まで天王寺動物園、1995年より当園で暮らす。……えっ？

ロンドン動物園？

おれは思わず声に出して言った。だから言ったろう。年寄りも続けた。ロンドンで暮らしていたってな。

(「London」 ordered by frodohart-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

杉

<http://p.booklog.jp/book/45838>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45838>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45838>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.